國姓爺明朝太平記　上

へ遠13
666
1

序

人形店には軒ならびて千里が外まで
張貫の虎が首つき髭喰そらして
和藤内に追従まげ海老らに色比より
衣裳繪屋浮世繪師は國姓爺が我まゝ
にて古来より仕付来りし唐流抔和画抔
風にして毛唐人に月代そらせきせてうきを
に髪抔いひ次第に小筆味乃おいせんさく

好文堂

門 へ 遠 3
號 664
巻 1

明治三六年九月十一日購求

操り哥舞妓ハいよ〳〵見物の帳市場にも
商人も先一番の銭をまうけて仕合あるね
和藤内が贔屓して今を流行てるや
読のしぬ事に文字いきれいもとりまぜむしやう
に作りし手柄ともを書集て六巻とし
嬰児乃慰草と云爾

享保二酉乃年
正月日

作者
其磧

国姓爺明朝太平記

作者 其磧

一之巻目録

大明宴楽殿に湯の戯酒
嫉妬の胸の火焼付る侫臣の悪心
菊〻の酒一盃に后の巧
讒言の嵐に盛の散る華清夫人

善悪わ二つよ破る南京皿

一杯よ盛乃高い二割出お清天

立ばつる皿が為令云八年よ逆馬

敵味方乱さおよ掛る君が御き

皿おとの勝負単中わ初庭

流一矢よ崩り月儀よ綴を解

是三桂が廢忘

姫か戊様わりし梅勤皇が立そ示州三案

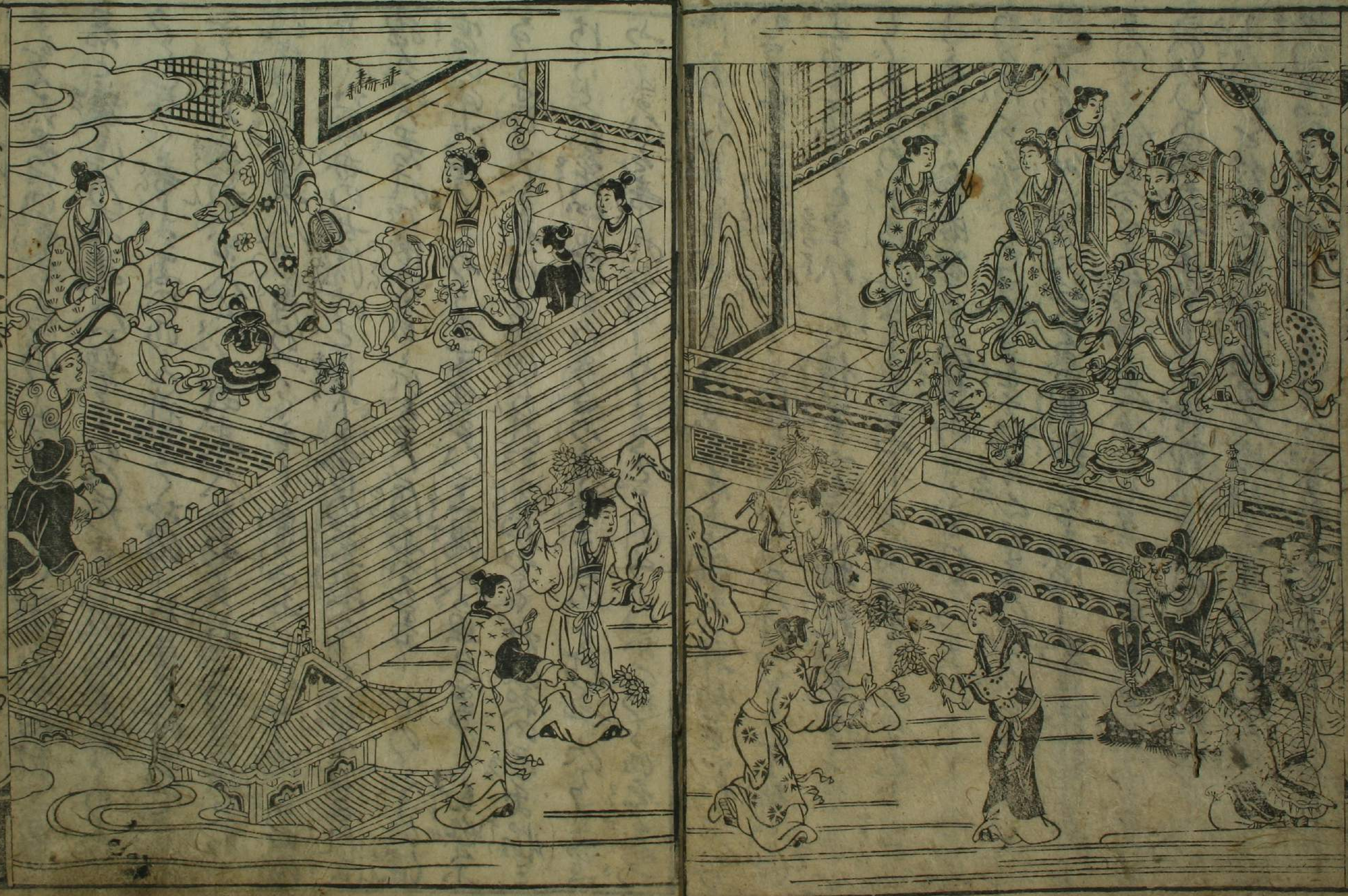
女房の忠節も為よ命代税小舟

大明宴楽殿重陽乃盃を酒

婦人長舌あり是禍の階なり天より下るにあらず婦人よ
り生ずといへりされバ國家の乱を政を遠ざくる事皆婦人
より出る事古今ためし多し爰に大明十七代思宗烈皇
帝と申奉るハ光宗皇帝第二の皇子御位につき給ひ
しが四海無事なりしかバ楽みに長じ驕を極め世を治め
ざりしハ淫楽酒宴に長じ乱れ花を見て美人の目ハ麝臍を
埋みて蝋燭を点じ歓楽ハ月なき夜ハ楼の上ハ蛍火をあつめて
燭よかへ淫乱日夜かさなりそれやむ時なかりけれど佞臣
阿諛ていさめず帝ハ万事酔てわすれたまひけり爰に
其頃婦人あり是を中江華清夫人劉枝夫人とて二千九宮女

小腰もてたをやかにゆられ艶なれバ。あれ御手の花か柳の姿をも見給ひ、此ゑみにしとやかさ華清夫人は去年の秋より懐妊ありて来月御産の月に当れバ。ことさらに此宮女侍児まで世継の太子は誕生と祝ひ。こゝの国母女院の異をなして儀に類をあらそひまちかまへ李圃といふ英傑の嫡男に李蹈天といふ者のありしが。かれ壮年の頃行跡よ遠く孝ある父李圃に限ざりて勘当して追出されし。南京に居事を知るとて李蹈天隠家ありて離ゑ出立越陶桃の老と十余年が程に訓をして。此をも父李圃は其孝をして子をおもふ心をいとしく追出しは子をまてる李蹈天は旧悪を改めてよびよせ。此事小家を出て陰で詫を

御殿の修義をなりとゆるせけり。元来李蹈天ハ邪智をもて儀つはづる事を天性として。えせと者なれバ人の心をさぐり執り付け上を下にと世に以して侍寄をよく押親の者にて一帝をちじめなり。王侯の業をとてもやしそれハ江南に立身して富禄をもて親に報。栄華を見てハ國をわく、其どんかんによわいさからをのハ悪かの悟を讒して。讒ことをさけ万民のまつれ行跡きろかつてく鏈大力賞して時大明へかけるは明朝を亡ぼし金陵の都と二つにまけく領ぜんと約せし也。偖もぞ畏れる事を出来よりて是ぞいひ小國の家をはかりし更に移動てまぞんにわ肉にま不に心をさりたる華清夫人懐妊とありちと見て甫の寵愛の只ひとつの中に咲をやいてぞ紅葉枝夫人はなかみ紅山谷にあるて



やまとの君は無念(むねん)におぼしめされども。なほや誠(まこと)に宮女(きうぢよ)多(おほ)き中に
君と華陽(くわやう)の夫人(ふじん)はそれとあひかさりしぢ。ゆづまをよりまさ
つまとなく帝王(ていわう)女の御ことはれども。おぼしめさるゝにて寵(ちよう)母
をうしめ宮殿(きうでん)へ出入(しゆつにう)して。女夫人をおそろしかりつきなる前に
は尾(び)花陽(くわせい)夫人重(つい)生(さん)おつとをし。皇子(わうじ)をそも御誕生(ごえんじやう)あるは
なし。國母(こくぼ)の女院(によういん)と左下大臣(だいじん)の宰相(さいしやう)深く祠(とどめ)にされば遠(とほ)く
紹りの附は君の女も宰相(さいしやう)目さいはに。後(のち)は天下とやらん深(ふか)く
宮(きう)の中にまもりあまた生人あひ。上陽人(じやうやうじん)が思日とする。白髪(はくが)に
まかせらるまで後家(ごけ)同然(どうぜん)に有(あり)ける。秋(あき)の夜(よ)の長(なが)きに恨(うら)み
けるとかや。誠(まこと)に少(せう)しも声(こゑ)のあがらざる。下(しも)ざ女のさかひにあはれなる
よるまひを帝(みかど)のおぼしめしをとられて。ひとかたならず宴楽(えんらく)にのみつ

よく万(よろづ)の事をよろしくおさめられければ。かんはんあそんでまつりごとなれば神体(しんてい)が
をしへられておいとしくれ一門ともども御伝(ごでん)合宿(がふしゆく)の、おちうらも
あるまひと寿(さう)まつらせもそうに伺(しこう)ひは女ありけるから
竈母(えんぼ)へども帝(みかど)によりて華陽(くわやう)夫人はまけまいとおもひ我(が)をとりつく
華陽(くわやう)夫人をとりあのかての下にいとおぼしめさぬの帝(みかど)なりて
も仮名(かな)でいふ附(つけ)は。おすまへ外(そと)男(をとこ)。燈気(とうき)嫉妬(しつと)は清(きよ)くなるべし。生(いき)なから
蛇(じや)になりて角(つの)をへたてひとめの角(つの)をたてもとせて天冠(てんくわん)の
下に窺(さ)ぞでもなやし。夫人をかへりくのけんとおぼしめしとおかれおき
女のひとつがひせんなくと気をとこうして中れけり。されば秘殺(つうし)
夫人就(がん)飽(ちよく)にまへなれてくなくめくせいふくをうかかうてそれ見
うけてそうりぎるに祈(てい)られ大人もとうらねんの鱗(うろこ)玉体(ぎよくたい)によまいひ

はさらにつゆくとおりやうはいひそせどもしてもうへ女は罪
ふかきとこゑはほの世の事をおもひやりて胸をいためてたえしぬ
も渡となりてみさまへは李瑞天なり。彼に南楼の称を
それぞれどるかれはおれぬ後の世の事上をおぼしめしやせあひて
御縁つまがらすかれなりて一しほはうれしうへ女
中のうひがふかき道理のおそれはいかり。さうても罪ふかきを称するも
志ゆうにおそをとりこみ節なきことを孕みで七月八月ふそおち
なるにとぞふかき経国の女どもは銭ある事をおもしろがりむ
大の餓食ふかきとあれど。女の身まつは罪ともにはとも尸さるべく
事ではありし。志られ丸むりしから地獄乃縁よ写経の女が擽
ふせられてほれ世で恥をふて神をもすく。大臣をたどりて

指髪爪を切りだましてさるけひの女ハの。乃中志らく剣の山へ父
字もんでの湯のわるさまをおもかれば志れねほ世のせんとやがまと
商おもふをおほしめしと華清夫人を悲しぶるものこころおぼしめし
とうちおハせぬりやもあふれ素の附の華清夫人帝の御まなたのふ
やうに寵愛をえらひて長ことおふ握ころやうれハ夫人館の
あく慎ひまひいふたよろしくうるさを邪もそえ老ふまこ二人
あるふたかりてとおは後志らく華清夫人を退て身一人寵おふう
かんとまくまくでもおそろしまれは志ころ家禎八年九重九
月九日の重陽極殿にわたりく重陽の御儀式おわり百官乃群
臣事おりてみち高楽の宴殿にうつら女孫ひ例の李夫人を召
乃艶女代わまも李瑞天よ志敏口とたくの酒もつてそのよ常の

御前に大盃小盃をならべさせて華清梨枝乃あま人をたゞの
大ねとしつらくれ女官に菊の一枝をおき双方かうべをさせて
菊は先軍せるし負るゝ女官は御前にまゐらへし其盃の酒をの
ましめ勝る宮女には三日のいとまを下されて里へ下りくるれまつり
棠梨紅紫の花と互に根ぶかに宮乃女中第一の大事とせらるゝ
きる花をとらずして負じとせめぎ合ひ勝負白あそびのまゝれ夜ひ秋の入
く女房達手にわやとして折たる菊を衛にまさる名ある
り所ろに華梨枝まゝ人より華清まゝ人へ甚寿酒といへる名酒あま
らせ給ひ梨枝のかわりまうひ名酒は酈縣山の流れ
甚寿二句乃偈を出付たる菊に下ちまるる露の
水にまぜたる花を飲ぐ七百余歳の齢をたもちし

おくまあらる酒のよし胎中の御子寿なる長壽乃様ら
重陽のえんをとゝのへ寿のゝわろうよくまつりしにぞ
りしこ給るまゝかれを華清まゝ人梨枝まゝ人へ礼ぎさする
恨じ御ひつるら名酒の入ける金盞をとりて盃によう/\とと
てふのまんまとまつ一面を家臣大司馬将軍呉三桂が妻柳云君
御平座あるの側とまるまへまつ夫の綱よもうひ
をあゝりとてあるまゝ粗略ある事もあり家来ある
名酒やとまゝ人よりうけもちて御盃を引とつて常まゝ后まゝ人
乃めしあるすゝの毒味をしてなるがゆえ作法あり
纓脂の御身葉酒をせよ日来まゝつけぬものは盃まて
身とおくり酒をとそ分れは梨枝まゝ人見えあひみつゝ

夫人はいせつにおもひぬかれし名酒とてとめおかれたる事なれバ
さうらひけしものなれど此薬酒は毒酒となるを待らまぎらせ
うかゞひが宴周へ待とらせん。毒のくすりハ夫人の為よこそがら毒味
し我顔にて散ぜしと。ぞこそ人も名酒とうけ二三盃ほしけて
さあしぬれどもけしれわかれのみ気色もなく。帝王は前に
むかせ給ひ御洞をちかくよぶ。かくまで華清夫人をかくび
なつかしく此女皮とのみはいうこれまでのしせて宮中にあつて
朝夕同じ席にならび給ひとて居たまへ給わらん。只今わらんは清
いとゐを下るゝ。宴殿を出てくつ朕が潮川の宮へ弟をとこぶけ清
うるはしひかつき花清夫人のはんや立ぞやもとより害せんとかさねて
奏し玉へば花清夫人はうしろまよのせ給ひ御しれをうけひやと

柳彦君がうつゝを大事にかけ過しぬおもちをたてさせ戸をと
かるしさわるのがゆをも有ければやゝせ給ひけ事も言がる
ふれぬめんげ下されど。さそかく君ひせ玉へどもちかく紫雲夫人
それいとゆかれ給ひ御出なくよものちらさきをしを藤原の女
給ひども深宮の中にいくらも角ぜんせとれいゆる
わかりされば帝紫栞夫人のそれをなかめられんがためまふ
花清夫人と共に三種よりわかつけなするとの勅定あるに宮中一ど
出されぬ花清夫人これんの中へいまのさとれば紫梅夫人
いよめと給ひば潮川の弟とさかせんとのほうゝみ只今日さかりまて
申されといふて有ね事なれど大明ゆへいまゝ出まとられ
まことにまらるゝ人皆かどうきけうきぬ

善悪乃両臣二心に試る南京皿　四

牝鶏朝する時ハ其御かならず滅ぶといへるハ古賢の語むべなるかなかゝる梨枝夫人李端夫が付智恵によつて毒酒とかんせうけまこと酒をもつて人をころさせ給ひとそかみしく皆ある華清夫人をかくまへしものも事におもひ世をはなれ。帝王を退出まゐらせ身をむなしく君の寵ふにほこりてうとんぜられしかたへその讒をかゝるをひとつもひそかにいへども帝ハ梨枝女が悪心にしたがひて悪事を見付ぬれハ大小の事皆此夫人にまかせられしかバ威益おもく成り。公卿大臣もかやうに奉ひ事かゝしに附ふかく李端夫人此女を敬ひて真の下にかくれんを寄するに讒し出仕をとゞめかゝる関ハ退世みる者に賢臣智臣ハ退

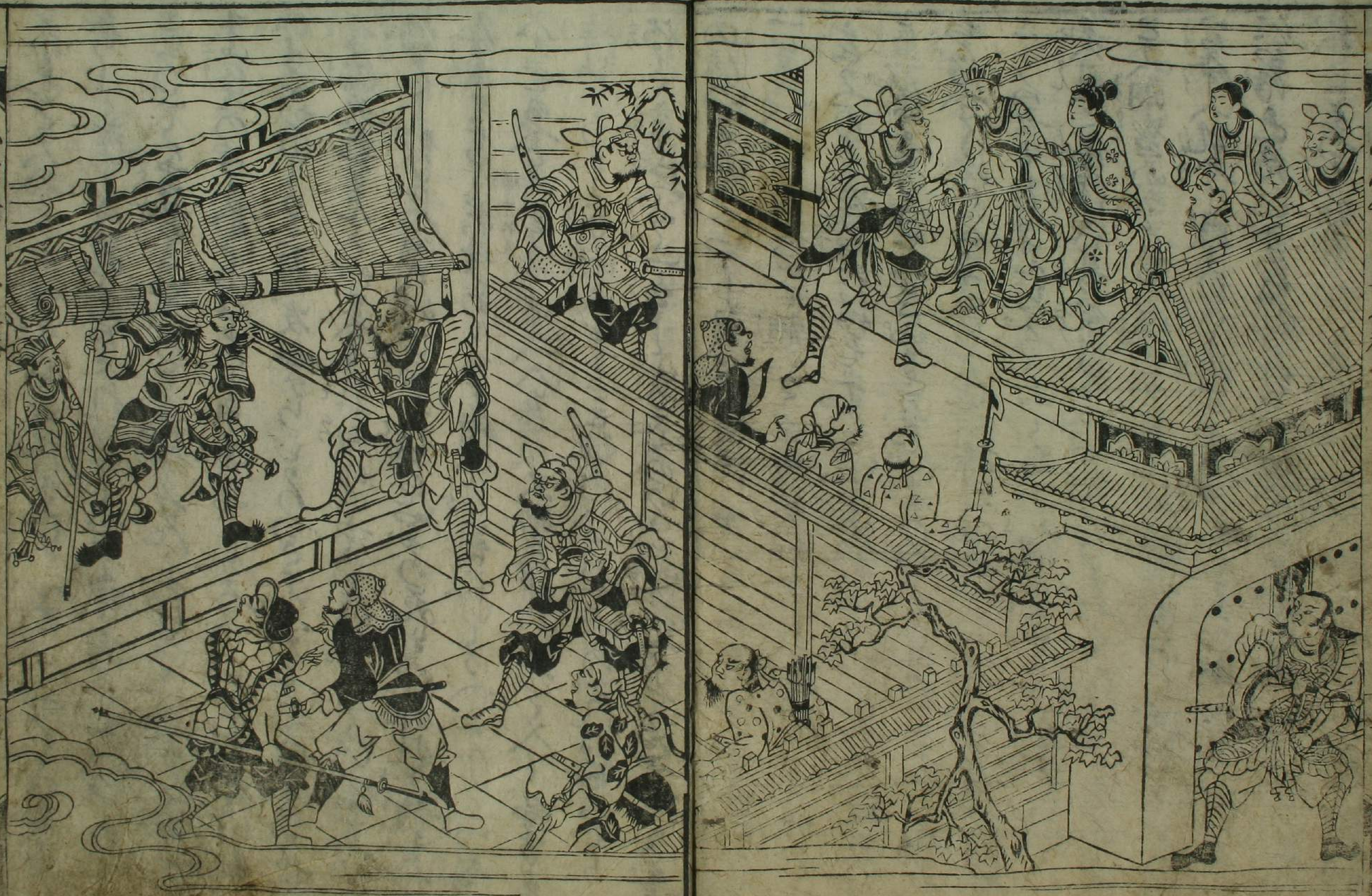
て山林に身をかくし。今ハ佞臣のまゝ君の側に進みてかハりと諫言せし者の言ハ帝をしかり女色乃遊びにのミ今日ハいつとなく事を世に申さず世をあやぶめども御心にもかけ給はずたゞ君の佞臣等乃寵を乱し気色を新たにやぶりてもいさゝか宮殿をわけ居間おほくつくらせ給ひさらに侍ましき。大司馬諫書三種盛宴をなし傾城の讒ひ酒宴しく。御遊の外の不礼乃臣極まれる淫乱をなし帝をそしりまゐらせ。君をせ紂やまゝ殷の紂王周の幽王は褒姒に溺れて世の政をもうしなひ君臣ともに夫人をともに遊宴をなし事とし。亡国を傾け世を乱り身を亡すう世に亡す。今梨枝夫人を寵ひ給ひて其ため乱を亡さんとかつて語り忠臣をしりぞけ佞臣とちかづけさせ給ふかなしきかな今にも乱お

あつらく国としてひろさいかんて事境はるかにけて、岩へいるべしといふこと
其側に国を領らふ大魔王那個といふ有り。これハ領ずる國は山也
をかうむる。此魔王が首をとる時ハ、千代長久にて國の鎮とは前
にいはれしかるぞうくはと咏れて、ちくさの剱をぬいて李蹄天を領
めつけ国がとるとして、すなハち李蹄天気色をかへ、我は国代わけ
魔王といへる何条気質が事なくあらん。何ゆゑつく我をさし
て悔しうといひきるぞ。汝が妻乃柳花君とてもはんめとる忽をう
弟子猿まくへをうかひ若宿夫人は邪丸へ惟根まくて、後見をさうハの
せんとせしうえ此異国が御側にありて無事にするをおもふあひだ
とのまゝが女房両眉とうしろひ、ひろ人をとうしたりよし薄人を
がぞの意趣のへして妻女ふかつく悪名つけていはく

て見ろがてんが我肉にて女房をとるもせうにちと此李蹄天ハあるあ
まじき事ととおさまらうつくいひけれハ、イヤさうでもない李蹄天国
を領らふ大魔王といふとのまゝが事よりも申にぞ、おらん無術なく
を君れは妹君旃檀皇女よりとうけ奉り、官女とその塩梅を
おそれしかれハけさくよりうてねられた。ひをよろぬ華清夫
人業よは彩をもつへ此義よ見まされくいまだ実否とてきを
斬るをねらうして主君よ艶状をまゐらせとのまゝがんよ国とのむ而
あるぞへ主をおそれぬ勝下れ招んを見さいめ出てる眼目へ国
を領らふ魔王といふが嫌事のたくし此よふを業よむくひ返答わ
だいふくれてよ舌切られまでうら謬言いうねやられてちくちを
取りと叔ふろけくつめかけれハ李蹄天勢ひよおそれて一言も

出ては死をまもりてゆるさりけるに。諫る忠言耳にさかふ時君非を
かくさんとする事なれば帝王大いに逆鱗ありてそれ臣を
て君を諫るは君の事なすれば是をおもしとなり。忠諫といふ
なをかへて侫臣の出頭をそねみ朕が前をも恥ずからざる礼義
にそむき一紋をぬいてかりまはし悪言を吐条をかぞへくれんに
あり。向後無用の悪言あるなどといふのかふ不念なり是人は是三種をもつて
ありくおもそひいさめて節に死ぬるは是臣下の則なり。就中
一命をすつるいさめは君の過をすくふ。これは生きてこそ忠なれ
にあらざる事に死をゆるされて勅勘をかうむるは是三種の命ひとつ
もろひしあり三度諫てもちいられずば身を退くといふ本文あれば
案は是よりもくにおいて魚をも讒人傷するれ九個出なれ

のぼつて君をやしなひ。世なをおもく思ふとも是三種の
一生おいて人ひと潤きうめをおもくとざされておいて
立のぼり忠烈の指ぞ思ひしるなおそからちちうき浮気の侫
臣一同にこぞりていさめいさまさや気づまりや窮屈やとおもひけるに
おぼへて命の十年ちゞめん。三種は艶書の白髪ふえるてぞの
こらば女ともかれちぢくるこそねに傷む事もなかりぬれと見つる
美見と備ざるは其命も太ひ毒なり寡しなく弾てくるこそ
又酒盛にある者は揮ぬるの気力をまして花を二ツとこれ
宮中へ乱入し賊は是三種の其外芳なき事にふと悪し
にあはれと思ひ悪民なるげさを立りて玉をね悪きなれはいろさ
親くは養ひて自害をとめやし侫臣のまへうてんの罰をとへて



華王と大将呉三桂が下知を請て、むかふてうちやく皆自害し
給ひしと聞くに、みなくまりられは帝太子をおとろきまひかくれん
と思ひて只宮女おこやつめをともなふんとのぞむのおりふし西遊の
下皮光のまゐかりらんより自害すへくもちへしとぞ御剣
を手にかけらるゝ所を皮女さらにとゞめつゝ先すゝめ
李蹈天是をきくより、宰相の近づきしに背へ〔?〕かけ案一つをさき
涙をぬぐひかねし時は紙一畳に短く死して出し首を待
ん葉をそへとさゝへをおりしは其時、作害ども七色く御船へ
入せ申へと御簾の中へいまり大勢の中へ立まよひ宮方より
拝をとゞめ李蹈天も心ざしもまめやかなれど、今はそれぬ所存ちらく
待くまそゞろに、一云やるをあいさつ宮殿して始まる也との事
此まゝあれ一門の敵をみやりまつく紙かとろし、いかに
君をおかしまゐらんとそれさへあれども大勢の強勢歎くへし
つゐにはくと呉三桂が為まつさとめられぬ今は誰わつく
味方に居るさまれは君の為とて忠臣とさゝりて七六人の若き
ねらうけまると思ひぞ勢ひ気乗て、作害まきへさそふれは主と
も作害かしくれ自害あり、しこまれへくて多くの官女
が数の帝でとくなりぬすむかしを学より今すでに死へと見るも
李蹈天むくくと越きあがり極は帝は生害とけられしか、今三道
みされへあへくは旗は呉三桂がものにならぬと落着歎
ようの悲勢までかくのことく無きくより韃靼をめづらしまかり
さいろまでありて何ほとは大明もたゝかへん、の取治王と案つけ

どうぞきつと約束されしハ今よりハ宮女近侍をしりぞけ社稷にこゝろを
おさめおもく一つくに福ちらびふしきるものハ八方を禄めまさせん
乱入なる軍兵の内より王やさんれ家臣梅勤王とあのつく李踰天
の翔画あつまれ青のおの御働一戦のをむなしくして是に事と
まし程ひいさみなる李踰天ハ先素今日よりハ明朔の主帝の王座
にたゞよつて帝王のわかれハ者なんと揺ぬけの百官とあひさゝへ
玉座によをちんとおれ鷹とかけ入れハいづくさより入来るん
よろぬ呉三桂に仕まなつるより李踰天ハ大きなけらし海ハ宮
をそろくとひろかぜ西へ落つて入来るをふーんあるとひそれ
呉三桂打まさひハふも素一まつ国をあいしきかまけハふん帝王を
ありおもふしなみで深まりの社稷をうさんへあるてかへして德勝
門よりひそかに入くらんであれハ若汝ハ宮宮を寺ぞせしめ置き
へむとりあくハおぼつかなし日比そぞうをきるれはろ世とうてん
来り来世のわんるハ世をその宣旨とかうより呉三桂おむかひ
ぬきハ天子勇を殺すをしても必ずしも大なるかくぞそハ死出の山三途
の川の苦にあるとも万事のゆかなるまなみやかれ胴をさすとび
ぞろ勝みいつまて帝王よの勅旨あれハそやく其家の首をさせ
宣旨ハよるやまむかれまじ。ちやくわせと禄めつられハつきさうそん
いかりまず。ちかうなる呉三桂のまたとへ叛足王の勇をもちて
そもくと帝王国宮あるへ下るのままに病あるとのあるばそ
益の御せんよりハ我よさてさひ今よりハ難題の御下知をうけハ今
まで汝宮禄まよりあるへとうちしも大事の前で言葉をせうといひ

されどかとをしくはまかく善人悪人智者愚者それぞれにちをなしくを蜀に付
前の難艱国をもてこうひ。それぞれくうけがたき人間に生をうけて蜀生たてさ
かくや。海先雅をひく陣条せば帝は陣備にて世命むらくたをけて
とらせん。其のまゝが方に計略あれば我方にも智謀あつてじゅうぬめり
むほんをもつんぬさはせんは自害あるまくと素てめまつりまへはぬ
疑ほくがかく。おまとふよくせぬ。といへば帝は武井の麓をかけさせのまさ
出させ給ひて行しとるめ呉の三種がいさめをもちひぞそのまゝに御輪は
たづなのさればとうしあひ弟をとうしあらんとせし所にそかうどもを文
ごきんけのまたをけのましかくひをのまをまんる帝生死れ中の里おまし
いけどうれ三そく刑に処。おきこともへとのみそとのおり。殺すと今を二九わし
ふんぐ吾下大臣呉三桂がうしろより大ひのへおまとおいと鉄砲を受

矢をそえまかく打かられいつまで天之模勒せんと手にもちりて弾
をあり矢玉をとてせ入乱れく銭ひくりの敵のかくよりをもよほし
来りたかんせば瀬に出てひて大将に三人○くつく御は呉三桂
ふせぎうちまつて方を打やぶり。帝をまもらし宣武門より立
退きき忠節のほどおきまくひあさ

血乃上九勝負軍中の初産

大明の太兵大臣をもてしめ雄は下郎まで見るを李闖天の麻
さく味方にまつりをの二人の命をすてて流ちらうとたのさかはめおと
との御代呉三桂で一人のひびくし皇后をまもらをおひまつりを南を
行して落ちゆくの回りをやぶれく宵害れそこともとまへの山中
乃松が下に帝をおろしまかりたてまつらく息をつきぬうちみる間

裏の方には王宮のひかり遠くと志く白昼のごとく人馬のおと
おびたゞしく龍宮榮耀これにしく地をうごかし天をもゆるがす
すでに藤太は行をのぞみつゝ近づきたれば二三人の足輕に
て志のびやかにかたるをきけば呉の三種なんとて夜宴に山芋をひそ
かに悔るうちかたらひをきく時方の君があちらふてぞみなるんと推
量して藤太今は衣裳をぬぎかくしおのれもさすがは此所へ
とゞまるとわざと鋼をいりて戸をたゝきさまの夫婦の呉の
三種をたくはへおかれしとやらんそれは都方の君まで仰らるゝ宮中の
發動とさてまづ都の華清夫人の御身をあつかる夫人
御供をいうしやかくて立のきゆかまよかしてもかるきを君王
乃御妹君旃檀皇女の御一人をもち世緒にまゐらする御ひとつ

あ君のおこりをたづねびきうかゞふに今此所で三か御身
にお筆はむともに仏神の御引合と洞をなつしよろこべば先
家よりは君はくあがく先にまゐらせぬひぬまへ御あ君が御對面
させ戸さんと御引わかせ戸をれは主上を后を姫宮を御悦か
ぞりあく呉の三種史姫の忠心の程を感じ召世にひきあかく御悦
乃おりふしろくより射ねもきを志らぬあかれ矢をとらへいなくも
主上御首乃ほのまもるとうち呉の三種をとおどろき給ふやがて
まく矢をねらはれはすちまへ此息はきたへよろづく見とまろ
つけ付るけさ戸世とかひぞあき呉の三種むほんよいのちを歎いづくは
わりとも志らねば馳合て讎を討べきゆうをおもとの御運
是非もあしとまゝ人皇后をいかふ今まづく御やまとみあてうきる

大木の松を根より引ぬきしが、其跡へ御先祖の骸を埋めし下
にまた其引ぬきたる松を植置し處なかなかにいくとせか
下ぱ西を立のき松山となり入る事にまた人今に此のあたりに
繁昌するそれつき当月は御産月ゆゑ木綿のはらおびとして御
に御殺して産出今は一見もひかれぬとて岩の根に御腰をかけ
らるゝと忽ちおそろしやさては御ひかれど其三種の霊宝が汗と出させ給ひし
時に御歎きありけるぞ御産ありぬゆゑに今も東に一夜にして
はらんあさる事はならずこれは此浦にて女房衆たちも
いくさふかき軍とて人家稀なる山中なれば鯉一つ餅ひとつ
そなへんやうもなし御腹の御子も子孫の為に事にて帝の御子も同
とあけとしに是はまづ子なきことのでかへと百の御家の強敵が

あまれたうち、おせうけてもちつとも動ぎぬ其三種なれ也今松
むかう胴がるゝかして歯の根がありぬとかるあれは柳営君は名
おゆうくあを殺よもさし薬ら御口をとうるほしコレ其三種との
うるに臣としろへ廻つて御孫抱でしんぜうまいよ御子がむつ
てれさるな中なくと世に代られは其三種はなるべくも是君の御分
はで中へ鉄炮はうけぬが産婦の腰がて事へ御身をして守
さ衆は女中此の男のやうにはまんざら御鋼はあるへちがおまへを
たのもまうおちてそのふくれしんせうもおそふぞおやおよあと
びおきるとやうにまきたれにあまるとし迎まえる君に花清主人あく
と安養産ありが鬼子降誕あつて御獨ちさとあけらるれぞ
やまとうわしや明朝の御根継ぞそのぞう世なりて其三種は手

此露見の節を主とせんよろこびいさむ其中に此女人は頭目をかんがみ
らまた此手足ひえ出でんは色かくとあせれども葉ざめあら
ざれは何とせんかとせんと抱かゝへまつらせるよりかまどへをさゆる
なかりけれ其三種の中をかため柳斎君はひそかに我を
皇子をとりてまつり義経をおこしてふたゝび大明一統の代
となさん此ハ一先旃檀皇女を介抱し是よりやつく海登の
湊をこして筑紫のべ西にすこし志づまらは九仙山の麓まで再居
とべしといひあはせ宝剣を手に此御肌につけられたる代々伝はる
御宝物即位乃志るし此年号をきさぬ是は吾客成郎への
後御位につけたまはん是上へあれはやもしと主人此は死骸が
かくうけ只今絶生ましまさせ第をさせ皇女に

此はとあやしみく其三種は手に入れて深山へ入にける。柳斎君は妻乃
洞にあたつて旃檀女といざなひ夜の中に山を下り湊口を落
のびけり。李将天は金牙乃李海等に客大人との勇士をそへ
ちりぢりに此あたりを五百余人と手分して主上をはじめ其三種
が跡を追っけさせける前に湊口にて御妹君柳斎君を見付奉つ
て是は何ましにいてそといふよりはやく大勢で度々乗まはして我がうち
さらんとせしめたる。柳斎君は女ながら打物とつてれなやさ
古今に名をあらはせし勇士にもまさる程の女性なれはもとより
此たびはまた若年の君をまつりかとせはいつしもの大勢女ひとり
にも切そらまし。程経るを問はれせんだん女をおひまいらせ湊を
九死一生の浦士の楼小舟をからく見出して皇女をおさめ昔

おきせくむらのへをしやうにおちらんやとや方をうちかへしみらさようしと又引の入しにくひきつ。鵝遶といふもの其名を稱乃鋒を持たちて女一人小鬢をひそかしつく切そぎてうせきて男の一ぶん立べきの海の妻あれ呉三桂が鋒先かどいあらじとも語く兄よと伝つかるを。もちるとも。ちやしとうては鵝遶ハまつかう二乃小なきられ演海よきふ見し久れハ李海方もかへとおり一所よかゝつくうちとあふて中にてつんであゆさりと八方よりせめかゝるをとらきそく切ぬけて皇女紙かくせし小舟をめがけみろをうつらんと舩ざしハまであさせをわきつきりきろが数ケ所の疵よ潮を立てて斬瘡くもちきふらひあり姫宮さ女。此并おなたハ中く船中にお伝ハかるをひゆまし

方一つきのびかつてるさび對面住り今れつらるさをおさぐさみにぬれておりよもどいんれ幸卒ではもうのおゝ重思を御しも八大癩神方叢の君の姫宮ハ舩立右の穫しもてひかへと舩をりこうしもって出きんとんさるとゆきと君ハすうどとさぐくさふ右つく渡くうわきり皇女ハ舩の中よりもふでいさ治絶して仰ともせんかまりやと海底よもぐとりて浪かまふふされ柳立をおもふ去乃志竜神威をもあひきんぽ皇女あめ佗舩ハ行方ほくかもちく日本の方へふきつけぬるとぞ寿ゐめ家事

國姓爺明朝太平記一之巻終

国性爺明朝太平記　作者基磧

二之巻目録

旅人に袷吹付る浦の唐船

長崎の唐ハなまかじりそ隠の寐言

惣兵ハ兵法の稽古場武芸は好けて和藤内

章坊ハ欲ゆへ[illegible]の濁酒

和漢調合親ハ唐人父子ハ和薬老
とけ分ぬ懐子ハ二葉より労し、　栴檀白女
妻の悪ひから氣かきこかうろ嚙の一筆
押掛客ハ振出に出かけた豚の油上

古郷の子胤ハ生盛菜もの味噌
力足踏んで立股虎背中に新しき男
四百屏風を腰に付る老一宿が早牛の残
ふ浮に宿れた娘の子ハ唐へ手け娘

猿人の仕合吹付る浦の唐船
其代浮船の海路と云ありきさめぬから杭するときをさ小漂
泊せしまち町の濱小浜猫を冷され曲浦の月に音も傷まふ
きれのとき六栴檀皇女と百官に團銭せしまと手世御ひかりも當を
みかきし金殿の中の綾屋に清身をまつとひあきらの東西に迹
つかまいさせぬ八清身のいかへろえ年ぶ小おきのけする漢郎一家の
身の中の清身をよせるまじめなんず母言の姿命をさぶあら長丸ハ
堪ぞきりまきる舟をし廻をかきとそるあるよりの風漢身小大日
本肥前の松浦郡平戸との浦小吹つけるまじき世踊りひきる海
濱の名をひ噂あきらかる芦の屋の海士が家すそて八何今稀
なりき栴檀女ハ仏法と共ではかしめ始をはなくて深風小

博労を入れんよりくく絶へ入せまとひきりやすく海士の子なれば亀の
中ざんまいおもいて毎しく常まつく此頃よりたてそそぎ橋広を
わくらば此所に入るとんとりきれハ、是ちらく鬼出させまひ此国をひく
うち度ハそも何よりふ雨ぞと此露わりなれ九座なりて因果人
ふ云語り遊せきれハ海士どもむかしより是を笑ひ、わらかな事をいふ
もの中にも海の男女あまた集つてふきんとするよ承の旅人となるて
から尾をふのつゝ下人二人めしつれて通りまゐらる驢馬の手綱
とられせんとて、そのまゝの居れ粧となるとつるぎ、付そひ籠の末を
出しておもひよりて走らる斗廻龍くもらく、ひさかたふなる
家より旅人とぞ海中より此海の名は貝ろ大なる貝とありてよ
きく仲食の肴肴ををもとめてなんの魚併揚く料理まくたのしみあんと
下人に申付て宝をとらめ、是程大きなる赤貝ハ志摩ならでハ見んさ
事なれ、此ままえんせよところに案内してまゝせよハ、其貝とむて
見るにひかりしふかいくきれきん此貝ハ下腮に鳴材なると、せんとす
あつけられハるふ貝とよつくとかきんと走れ左たるまゝ、是ハ赤
貝かるとことゝいふハ今のかんたしくおなるれと旅人の宝庄あつまる入
て笑ひあきり中に二人の夕家来の内一人きびしく鬼家なりて、是ハ
此所大ふあそてふハ吉祠ふありのぞ、おまへハ出海九山ふくハ出羽屋の
方さハきぬとりて女郎屋の一妻此家よりしさまま人となんとそりよ方
へおよりなまるてひつのく私ありし清き、ららく抛ちおへとて女郎お
国利ちく玄藤介を仕り文見の文まれとて丸山で乃女国利さる
ふよつて大坂新町京嶋原の仕都とも文ハよ方丸名家の姫

まく猫よりさる守をを見利させんとはやかりつまてれて居り
よろぼよび赤貝がなまれ日まてひつぱてるへあまへのかり出しなまく
赤螺まづ高丸日よ大鬢とかけりかきこまつてる事なるんばおます
丸山でなるふへ鬢をこうば大へおそうりしひと上赤貝の喰付さへするよ
鮑方出へは上赤貝丸女郎がかおりひつぱてくまするぬふへひとりてひつ
ごやと前表なんといやとへやをされまとまへりといへは方の大きに悦び
いりふとさふ宿やもがわくさけと三人へいりふてく三吉なのきと許る
ふ付やらあそこ迄へたりのあとが何事ぞと海士よ三人へはせんなと
浦へ吹なかされて来さ船の中からあがら赤子てさうけるひ
女郎がおりし猫のひあさらてさくうまゝと見んと露ん人とどうせへ
宅へまつ猫子よりよふへ天より上へ女郎を親ふ我よおさきつけあるやうな
猫なるへ出をさてんろらびとるまよう飛ちろ主屋三人へいでなる
ふせんぬうしひとのなるぢさあそ会来食が結よとりつてし海
あうろかんよとい人へ年よと例へよりのふ方かる高麗をさまれさ天
冠をあしてござろがかさや三つの流の舞舞丸きまとは女見が志
んど眼へちろひまとまへといへはゝさうかやせんてん官女ゆ同おろ
たいさんちん法んはよある君をんとうめへのるさんをうさいとぞ
がむさん名へとるともまんいつうんどん富おうりてけんなんぶの
やあくと佐おうくさあでくと帰わへひそれいをとその字来長
勝まうれは唐人口がでんぞ我は大唄の其女のいまやと君とうふ
事をさうとをしのたと秋出の姫れでおるがもそれるのふ国のかく
つくいてへとをまと会よせるいれなぬ男と大臣殿へ申ちそく

まゝつゝきかゝる色を好みよし栖くらうともをうとれぬがらん
なりがくさくもまんちいろまんかやうして唐土にも延喜とこそ
ま人ハ紀の国志ハきくしひと日本女ハ何となくてうちとけてもむせ
つゝり数珠の海よりま事仏ぶつされバ女ハ文字本が神としつく思
量かよふてもあちらんかんでハやん志やの敵とうてとろよりわが
役よかぬとの二日まや大坂新濱志ぞおのふかん世起ちの悲死の後合
志く乳獲の俗ハ天竺牢人の天人の彩向じやといふて小猿まで
ならより知ぶ女郎ふハあらぬとの志やと思業報あるとかうとよ
九山新女郎袋乃只殿様ふをまるい唐人もまれ女郎ふハ縁がふて
もまらひ事するが川すがまハむろひ遊浦が苦よ合の三ぞいふも
なうせいとちの酒ふあたりまとろ。今時ハ寫經業女でさへ二年切く

又西国といふ小猿ハ入まさと云商人ハ我日本のやうよう酒に一くハ迎
でよ酒ふいでつくまんおまへがよう商人あるハ枉を三文がり積てつま
く悔りる郡とや女ハ何と女房人ハ我かちハあれでがいその東く
和物の志やそてられどもちがあらこんでおきてゝどつとみやハ出と
氣志やが何と庇よむつうし事ハこまへりいひハかいま一けとるハ唐
がう日本ハ宮人の扉まふぶそと浦が海士きよ小猿ちうちそみと
こゝ西せ枉けあよ山女郎と親く一富志きふ西あゝちをなさへいさへ
あの業業入西方ハ苦業菩薩かうとされあまむろひ座敷ありと呈
女となる又よ後樂書へ云とるし世れど背一裏ひ京中まよめくやを
なまむとよてみの者えいつけてとくとより浮気井一の亭場あと
まれ志うとちよ情迎まして他の生房方りもちてふどり酒まそて宿

是せい方をも又意見をおちつき堂母かたを跳ねず焼てまいらせ玉枕
是りて座敷に出さうぶ縁ところびまろび庭に花柄木刀書写学と号し
庵に似合ぬ高貴なる六亭坊のかゝりし一武をとらせし侍の誓これを
是は愚僧が平戸の兄弟町人が弟子庖丁の外釣鉤とかいふ笹手に
ものく事をもすし此家の住居なる六十所に遊びの和歌を見る
て隠人の手なりが親の老一宮といふ人をかくて夜ぬけかくして此所
に逼塞し七つなれし二子丁子と称の実をさして大かん金を
とりけるも只今は是で一嚢の有徳人となりて慰まれかゑ侍なる
身かてあまつたる遊芸をもつて世の遊芸をかへて只あけてを
美ても武芸と弓とに軍書に眼を遠した兵法剣術を鍛練しかの
書は物書き若者をは生字へよびあつめ毎々武芸の稽古稽古

戸障子をたゝく事では、あらぬ其代は常々吾に手を
づく愚僧は乃今力の遊達する大兵なる太夫を縁をあげまで見つら
てござりまするのごとくは此母分をゑそくをめぐれちるまゐつて
つまくとさうを宿を志すと申事を志てゐると楊僧は明日までを
まるじに夜中にも此寺を情まく出まかりうつひし男ともしも
今宵参られては此夜半にかゝつて稲荷の何とやら中にひとかい
あつて来たれば分別をたのむといへば又意気子にかゝる
に男伊達の家かれあるも男の意地では宵越しに魚をとらへ
て誂をとあさせぬ仕様ありとはふと尊みにかゝりぬ
そんな事では男にあらぬ其のくれおき稀に
方便ありとはいへどつくさず大きにむかつて此奴なら大抵の事で

は如何まへ見つと主を弁やうな者けなくてはわれ方からんぬなく
かつうまじきもんと思ひ去年れ大陰よむつうしは借銭先をききめく
かへしき拙者が仕出しれ手便ではまつりおとまへりと強合されへ
ども今ではの中を陰りまうな物まやと方々を同心なく亭坊は
つまふ此計略を事あしめひまる所へそろやすと和尚閑居がお出と
来られ男が去らぐをきつめ。まづ宮本を佛壇の中へかくし初とらする
すく方々を桐あふとつらく又立乗面色かへてそれは法をさらなぬ
なまされうこさゆうでは拙者男れ一ぶん立ませぬとおもつりふいひかく
家を和尚閑は郷をいふとひわが世乃方様とは去らと唐突へ法つ
とこまつくこうや亭坊が流が方うとにへ上昔の手かの世
住を出やうる前中宛るが何やらんやまをいはきれまとゞおまへの法さ

づくはかんぽんまうしても我よ大手がある由へ伝まいらまいらせぬ
首尾よききとの。先を和尚は陰りとしまって是が大事の所
とへ宮本は鵜のやうな眼指ぬのく自害せずは男が立ませぬ
。とるやかれ人の耳へ入ては恥まつくはなどと云はれませぬと狂
言とうくと亭坊もてあまさこれは金銀あれはとうなる陰りある
去られは我よ誰が知るのも定すのも高いひるあさいひさ出川
むずとまうあ務へと割きるを。和尚閑又宮本が眼中を見んそれこ
まど。唐突な小大丈夫をのくたゞこがん合よせて去をりして見
く亭坊こまつく。おの仁王よ自害させるへはあるとゞ。一命強う得
れ事が胸中よめきはわれゐよくの眼まそはあたりのあり。所化衆
驚かれ元眼中は悪るあり。何とも止めぬ事と眉あのよ鋤なその他

しばらく工夫し亭坊に寺は何国ぞかくまでハおぬとはいへハ入道
きゝつと志てパテ身の上ハ何とのがれんとおもひますせしふぞと
まがはよきつもりハ和藤内もやくかくぬらぬ六十なれハ
ぬの狸あり只今あれ仁からぬ事に奴を心乃上ずまうす
らもすり奴を心乃上ほかくく文字に合せ見れハ恐乃字
かく志のぶとのふよみとあり獅乃国ハ此内よ母ふ君あるゆへ
ハまれりと押入戸棚をせんさくし仏壇の下をあけて扱そ皇
女を引出し亭坊も大黒も共に縛り宿
て我をふけてきうくりと大きにいからせハ和尚の罰
族はわくぬ女あるかいづくのものぞと咎めれハ皇女ハ国なきハ
明朝の様子かくかくて世をしのびたれハ元来和藤内様

文が詞乃唐土とはいはんかたなれハ子細をのべずして大きに
驚き頭をさげ扨て其大明北舊臣大師太夫鄭芝龍徹
将和藤内三官らも五の子孫の縁つきまざとゆかしと思ふ南海
と称し車継まことりて盛悦して親ふ文が宅へ御供し親子所
そづき合ふ度大明の御代をもうるへし冥途大師座あり仙帝の
震怒をやとんじなるべくきつく守りしと唐土を立
御照送門はじめ皇女歓悦あさぬ程ハ和藤内三ツ五万之文字
とすろうことふるミ人をかどうと大臣若山はかんかんがおぼく
を立て七根亭坊よハ皇女をおかくす我宅ハまいり七と入る
せうくのゆ姫宮をおけせまつらく和藤内ひつそりと和冠よ掛れ
男子ハ文来の何大ふみさしせし今ハ[illegible]ます合ふ今へ[illegible]

こつまづかまれて和藤内にあるとつるのごとふがいなひしてひまを立ちり　名を
和漢の調合　親は唐人　子は和藤内
和藤内が父老一官　名は芝龍　字は飛虹　泉州府の晋江縣石
井の人なり　文を能く勝とし杜牧の府より勇を好んで剛強人にて
詔す大明神宗皇帝につかへて忠勤をつとめしが代々の
ぼつして思宗烈皇帝嫡楽を好み　鄭芝龍が忠諫を用ひず
んで追放し給ふ芝龍ちからなく唐土を去つて日本に渡り　肥前の
松浦にかくれ住みぬ　平戸の長の娘を嫁一人の子をまふけ　唐
土和国の字を取りてなづけ　和藤内となづけ
まつたく若き幼少より力量すぐれ　人に越え成人にしたがひいよいよ
勇猛にして軍法兵書孫呉の奥義をきはめあくまで
かゝる所に大明国に李蹈天といふ佞臣あり　一官がごとくこれ
御代に韃靼をかたらひて古君の妹栴檀皇女を和藤内によする
ものを芙蓉ゐわたりをむかひ和藤内にこれもつきて
父子共に寝食を忘れ昼夜軍術をめぐらし文老一官瑞夢を
見て和藤内に語りていふやう我思ふにまさしくまた吾国の軍は二千里
出て西よりかへりて吾まさしく夢を見てより吾孔子の図を考へ
よといひみれば和藤内すでに二千里を出て西に利
あるといふ大明国は我国より西にあたつて二千里の彼方軍法の
夢と兵法を去とかくしんぜいは水を去とて今は此一将のために
まやく田舎の地をさるべしといふに吾易をみれば蒙卦の卦にあたりて
師卦の軍の象なり坤上坎下の卦にて湯を以て宣法を統るといふ

一見なく数万騎の軍兵集てさりながら大将散々に打されたす潮に
たゞよふ日本の地をさして蘭京小京をさしてより出て来る
呉三桂と軍兵を合せ李蹈天が謀逆を亡ぼし軍勢を遣
韃靼へ逆よせんとて居るに時に御代を見て乱世を
わずか年に和藤内が親子をつれて来り出船して弓と理
をさして七戸なれば一官夫婦にいかゞせん心内の者をまつ
らも悪く若ぞ陣の用意をして居る程に夫婦も同船に乗り
母親は傍にさり親子夫婦一所に出て且は敵をさけに似た
り分かる時は親子の中に怪我あつても行きつけのよりさて
お役をおれるの程なれば海は皇女の御供して若者の浦より出船
さゞし給ふ武濱より乗出しりきの主君を取今は大事とて
此千里が竹まで再会せんためにとて立出で来て
姫君よ一官夫婦は濱より小船に乗つて沖の方へ
出させ今時出来て申さんとて和藤内とぞ
思ひ敵を武勇と頼むものは女ながら力を貸すと
つかひの者の男と二親と一生の内
謹よりいかれぬうち色をはからひ紀伊の熊野の
乃軍人達の実否をとく大将の様子を知て
夫婦姫はるかに年の内に見ゆる小舟の
様子のおかしき其の所をたゞ女房は小舟に
玉藻川の舗を頼み市に持乗り給へ婉は
都の人の遠き郷に人の手をつらねて

ありぬ。和尚問ひ給ふはおこみ人にむかつてひとつ問ふ。京地経云とみて親一
官がさぎんとかくあり世事は問れおく女とあふが是じ。ここさまく親より
みあつけ二親老よ和尚問の指南して安楽に世を過す。すさまじく女に入
けつ〳〵思ひ目もあてぬ微塵ならく廣世へ出る事なきを見て泣く
清まて出けはとうげくしべし。さもあらずして六親父にわかれならずして寒陰にふれ
ますひ事に師おんをするやまひ。一座宅まつりの孫秋を一夜まで手足
ぬけくゆくより外へはあまりじと体質によせて女くと云ふ事なく世へ出でし親の
て事くことに我おやちと女が癖気のおそろしき淫蕩まこぼれて心ごころで
親ぐがかく生死のつくこそあるふ我よびまかれ。一すじうどうれぬかとよ
おせく富貴となり、まごとの事也へ出家とて祖とうとけて先生のせ
まさてまはりこと事へのさこみおろしてはけば和尚問ひ給ひて寓の

前途よ先は氣かかりとぞ邊りつかざて空寂の極をあらはれん
問より出むつ飛お和尚問ふよむさやかりつきさ時さへ廣から女
房よんで親や子とも女の名は出也へよ。親よ夫婦つまで大明と申
鏡ぞんと申へひ出むつとおき子とうあつく引越くれざるとひ問の
下男三年かごねをして。すましさ。よしあはれんの兄おとうと
てさうさとふ世りふとふなきるで。廣元羅はおうゆる事。天竺
じても。鈴文海でとほののくせあねばおかれまぬ。親かくと廣兄女房
がかとしさうるわれは人も酒盛してあととも女気ぬ入る女あれ同信
をするにし。是非清まてれてむくなしと從はまどぶかたことけは
和尚問の今日にし。是かどれ老君にかふひとりてかへし寓さ行は
三日流めていは中女さん庵をあらし。寺とうらとく事あつあれぐ

んまかりし真奥にまさいくられし栴檀皇女を奥よりよいい
さるひ出せしハかくしけるとも又一官ハ古主君大明国の大王の
姉君の子細あつて明朝大乱におよび呉三桂が女房の働にて
は取よみせきり流されとかゝらしや也一所に漂ふて西浦へ吹上
られまゐせまし素の事に対面やふよる邪宅にかくまへやし今一
夷大明一統の御代となさんため韃靼王にかゝりともしは一戦に
勝負を決せんとの勅子ほも廣王へまふかり細々ハ只とひ姫宮を
は信やしてむん事軍きつハの大明は本事きまに添ちもと皇女代
そちにあづけ日本にてめきの事語つて私くは姫にまゐらせ七ハ何と
ろまいをとらきかよ納りやくられまいかゞ一命にかえるの皆百余
州ともかへぬ大切なる姫を。なんぢにあづけおくかへ黒べれらかれ

らぬ御姫君まゝつ子とせんハまよ流りふる一旦信の言葉ならずんハ命にかへ
けくきのむぞよいへハやむりかくやくのし宅らハとえ抜あれ
ぬ身からハ行しれ一く姫とやさん書すこおか主ハ扱いあふもあ
まゆハふもあつらりまりん一ちハ流をやつゝ住らん流にて
で息災く軍がおらふと人れ後へ三まさり怪我とせぬやうにて
ふさしび國たる都をうんまて下されと涙とながせハ栴檀女も涙を
かゞる返付逆ひれ母とまつと三人九ゞひよいとあまびれ涙の詞つきぬを
おを云ひきり和藤内ハ一人唐津の浦よりふ母よ乗る大明へそし
わすろハむかハ皇女をあづかりや我方へ供しよろしくをてなや
せども皇れどくハ唐高をまさぬ母へ行やら伴らるれさいかでん皇る
ざれハ癒鄲をおよおかく然く仕形で大方様るめらのむかう

おやぢ小草履かくし手飼の三毛の猫をとらへてまる殺してしまへ
庖丁捻て料理せんとせられしがふむつかしとさえ候ひしにされ猫を行
思ふところありけるにやそれを猫ぶりとうつくしきをとれ共おやぢ庖膏
其より後で以今姫宮のごぜんまいくと作られしは猫を胡麻の油
みぐるしげに喰せとありける事ぞ縁起がなふ事でありしぞ虎の人会
肉食をいたされ猫鼬でも御膳然お附からは料理してまいらせ
よとの事ぞくまんづくいていふなりし運の朽を待ばかりぞ和
義貞は万里の海上をかすく手に永々万歳を押よろ言をたゞ人と親
子の舟をとゞめしは此ましけむ一官は雅びを接たまりて定
男か千里が行をも虎のとも大数あり此所ま人別条なくとそ
も御近は大明殿へ帰る事でするやうすをのこしおり猫虎は力は人倫

れ勇力にておよぶとて日本の神わかよおわりぎんは伴く座りぬけ
となれ信をとり七と親子二人おくまで廣とう千里が行よ舟
かれは和朝よ見なれぬ猛獣れは実ひ風をおこし砂をうかち眼
のひかりをまなく同じ毛色れ虎と喰合あ虎のたけりを都は地を
震でそおびた老一官見てもて虎さ人力よは叶ぬよ二疋とよ
出まふは狭きが運のまことのた大明王の不幸をむすりて七むさ
くと猛虎よこられんまりは此方よりも気かつくせあておさふ
癪と付て猫とも相果んいさ事のなかく一疋づゝまつるくおぬ
とらるけそるんとかけ出よも和藤内もともくとめ手をとる
猛虎を手まよる事をはてる千荘子とりるもの此とれはくおろ
れ虎をかんかけ鉄炮をとつてうるんとてけきとおつ人をとあひ候め

此ころ此虎ハ牛の肉を喰よかりとおもへバ、それハ牛まようをひおつて而
ほまれてかうべしたがひぬハちへきさ虎ハかくところまれ大き成
さらバ龍涛く七ぐ。まづ龍つきてびまとうふおりくさいきさ二ハ尾
一本ふかく二ろ此虎とおるまたる程よおうぞやとひろれハ下荘子
むとためらひおんすふ。おん此ぞく二ろ此虎おいてうひちいきさ六かぜ
ころされ。大きさあるハ蔵をとくかくこいきさまなり一西をやがて先を
うちされ相手して一挙に毒虎を殺しと筆りひハ志ずかくれ見合
あへし二官をとびかふさ行の根よけおかりくたゆらひみるふ
虎ハおんくかとこそまれかころ虎ハ蔵つきてもとりてよりて見
申さあ。和藤内さあるうとちう口ほかりつく虎の首をと引つかを
かこ入をたずさくせん門わかく志ずかせてひあり。それハ古語よ

毒虎ね戦ひて死ぬる所一疋きつねをよおいて色を噛と中でく大明
韃靼ね戦ひ今こへん勝利をおぬ凡そ人馬の病つきさ労し流れを
きやむもの多く徒ハ勝軍ハ気をもとめゆへん宰中の西へたち小蝦ふ
てもおれふ府よをしよせる根あるハ一戦よ大利をえん色今和藤内か
ころ乃虎をとろへうふむかしかるに門をよしと程びいきみ親子號
大義涯よ志づちらきやとみつく労ぬまじをけぬ

古郷乃子孫ハ生国業花の城郷

越前南ねよ墓とわけ胡なる小風よ断かぞらひ生ぞしげる柏よ古き
を志るべさるかな鄭芝龍一官ハ古への人家唐将 叢林ら翁庵去
乃風俗よおもひ和藤内よハひまる人我出生乃国とおいへども此地ハ
ほく祖父ぬれバ一家旧友親香をとむらへきるべん。付ふるの代わか

清道

つゐに天下をうばゝれ李蹈天が引入し韃靼の夷なれば奴となりうちよし（の志
もろこし人を君とあふぐべからず。猛きもの忠臣呉三桂が生死のほどわからず
かくれしは唯一人何とぞして義兵をあげんと思へども南京の地より一城を
ちからに頼む宗徒のつはものさへなくとう〳〵倒れ落ぶれて今に
存ずるの事あり。我昔日本へ逃れ日本に有る時一家に残し娘の子
を乳母が抱て捨置しが母は唐土に産して南京より落ち延び嫁しけるは
此女子成人して今は大明の甘輝といふ大名一城主の妻となり。我日本の
名をもって此をたのみ聞えなば娘を頼み。せめて甘輝を味方
にたのまんと、武士の意地にて行程八十余里を経て獅子が城といふ
所へ七甘輝が居城へ急がれける。方々がたのみ元より和藤内の子
甘輝が城へ急ぎける。扨甘輝が要害獅子が城と申すは山を負うて一方の

白雲峯をつゝみ谷めぐりて南面の表口は岩石そばだちて九折なる所を
まわりて行く事十八町岩を切りて堀とし石を積みて塀と並べ堀
には藍を似て絶を張りかけ黄河より水を入れ楼門にて出入り矢
狭間に石を積み並べて所々に石火矢を構へ時を見て打出さん
ん為の備へ日本にも聞えぬ要害なり。さしもの一方の要害に出遇へ乱せ
といひあらはされし男女老少の事まもりて行といひ入らるとぞ見え
けり。右近(?)衛門は母を伴ひ道の程も知らぬばかりいふべからず和藤内を
始めとして諸々の勇猛の士たる鉄門を攻め破りて
先をあらそひ要害のさびしきとぞ思ふ。白木の梅を出す時に
皇帝の御命をうけて軍中の総大将と仰ぎ勇士の思ひ思ひの軍
かくばかり大将甘輝に対面して味方になれとのたまへ

やまとはしめやもろこしの[illegible]まりやとのそみ[illegible]

いは十万騎の[illegible]まつかれの[illegible]城を[illegible]

三国無双の気のみじかき[illegible]日本[illegible]

子ども[illegible]根が[illegible]生まれ[illegible]

もうしく御寿命[illegible]乱世の[illegible]

あまた和国生れの[illegible]一宿[illegible]

あはれ[illegible]の勇とそ[illegible]

これを今人[illegible]項羽[illegible]勇力あり[illegible]

[illegible]祖[illegible]天下[illegible]島江に

て討死と[illegible]大敵を攻[illegible]天網の代

[illegible]と天使[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

との事なれバ安穏そなへるぞと申へかくと通じけれバ甘輝が妻
錦祥女ハ楼門よりかゝる由を聞女ながらも自然和藤内が
出て日本よりはる〴〵是まで参られし事よろこばしく思へ共
まして今天下悉く韃靼の大王にしたがひ我夫甘輝も大
王の幕下に属し此城をあづかり居る身なれハ此関
かく用心を仕るからハ和藤内の事なれハ我身にあれハ開
かれ難題なれハ母御の縄にかゝりて城内へ入ん事なるまじ
此入給ふ事ならバ和藤内が待給ふ所なるべし入ん事なるまじ
らじと思へ共母御の一宮いろ〳〵なげきなぐさめゆるさんかで女も親
子なれバ相の書通へむかし三人出つゝも内に入バ楼の窓まで
虹の梁高く屋くらとてそびゆる楼の上に錦祥女一つの箱に三人をむかへ

国姓爺の母ひそかに忍びとふらはれけれバ母ハつゝまれて子細
ゆかしと思ハれけれバ一宮ともに我父ハ鄭芝龍母ハ南京
苦しくなりし父ハ讒言にあひて日本へ渡り給ひしか我二歳
なりし時の事なれバ我ハ乳母の宦官に抱かれてかくれ住
事もあらんか我父の鄭芝龍日本肥前平戸の浦に年を
経て今ハ名を老一官と申ければ母ハ日本人にて妻とし
妻と父老一官が腹より生れし弟和藤内といふ者の兄弟
乃此度日本へ使ひあるか世の大明の都と此両陣の
やもくしに生れ常に国を思へ共かくむなしく世をかなしむ
母より世の恩骨髄にてつし今ハ大明の御代とすべき為
正統の主の臣のいかりと親子の合二千里の情

ともなひ出る所へハ来れる者なれバひとへにまさりてくら一城をかため
まへりつきと薬計を頼むべきと勅書を下しけるふりつゝ兼て爾子
青山の所々丸史耳輝まれ仁義を守りて名ねと申ぬれハ血をそゝけ
元縁をまかりてやう〳〵何とぞ其輝ハ對面し丈明出家頼宮寺
此常寧を云ひそろ陰をかし前ハ元来丈明の居あれバよろこんで睦ましく
属し給ひんと云ひ推参せし所にて此他の名にまし今まで〳〵私の倫ても
祝ぎの思召を徳ひてありて之がむかしの方ハ二世にくゝ真実の親のなき
まかりし成人する人あれバ我も亦ハあら〳〵天道をかくや接ての思ひの
ごとくにも人の嫡子まかりく其輝まかり世あるれと潤ひて理ちられ孫々相続の拝
子せよして様ハ政文相守継母君まかりて世話ある〳〵ぞやとほまちか子
生ゆる潤ひをし然に賢の仕よりし七世の孫のあひぬる事感じて悦び
涙をとゞまりし今の錦帯母中きろハつま〳〵あれハ其輝ハ家の為ハ人々して一世の為
ひまくやハとても母君がふ中に大事を打あけて今やされぬ人あるまで庭の内ハ
孫どもの元服のふきりの徳まめでて悪事をかすて人あるねハ今疑難まで言さ
かひハ辞あらん先ようやく無の内より言とがし世話よとハ云ひてなき先頃今もや
かくわかきし此大事にあれのうすハ女房と名づけ嫁をあるまてあらて名ハ
此庭ハ言とよどもの悪事に対役あるまれ何が音酒ハ大かたと云ひれや云んまつ
酒宴せるもとかハ心ゑんつまよあまく中かくと此体見あるまじき事なく
をそのうく諸臣国の三箇茶家の二くせん筆の小男共のあ酒と肴
乃とける難義居り其ついて夏の心躰ばかり和泉国密付ぬ美食よ
音打しして葉飛しよろこふ事しかぎりなかりし
賢女節明朝夕鑑 二之巻 終
竹文堂